

平成29年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 愛知教育大学附属名古屋小学校
 種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☒ 小学校 ☐ 小中一貫教育
☐ 中学校 ☐ 中高一貫教育 ☐ 高等学校
☐ 教員養成 ☐ 技術/職業教育
☐ 特別支援学校 ☐ その他 ()
 所在地 〒461-0047
愛知県名古屋市東区大幸南1-126
 E-mail ありません
 Website http://www.np.aichi-edu.ac.jp/
 児童生徒数 男子 365 名 女子 346 名 合計 711 名
 児童・生徒の年齢 6 歳 ~ 12 歳

2. 報告期間

平成29年4月～平成30年3月

3. 活動内容

(1) 活動の概要

当校は、「○健康で心の豊かな子 ○まことを求め正しいことを守る子
○よく考え実践する子 ○人を敬い助け合う子」を教育目標として、ESDを
これからの社会を生き抜くために必要な資質・能力を育成するための教育
として捉え、ESDの実践を通してグローバル人材として必要な資質・能力を
育成することを目標とした。

具体的には、まわりの人との関わり、社会との関わり、自然環境との関
わりを意識しながら、①まわりの人と関わる活動、②社会性を育む活動、
③環境に対する意識を高める活動を行った。

①まわりの人と関わる活動

【2年生 生活科「ねえ ねえ おじいちゃん おばあちゃん」】

本単元は、学習指導要領の内容(8)「生活や出来事の交流」を受けるもの
であり、＜地域で生活したり、働いたりしている人＞を学習対象として取
り上げ、高齢者の方々と交流していくことを主な活動としている。

子どもたちは、高齢者の方々と交流することに対する自分なりの願いを
生かしながら、高齢者の方々とどのように接したらよいか、考えながら交
流した。活動する中で子どもたちは、高齢者の方々と気持ちよく接するこ
とができるように、【一緒にできること】【会話】【態度】などを意識しなが
ら、高齢者の方々に対して親しみや、交流することの楽しさを感じることが
できた。そして、「おばあちゃんからお手玉を教えてもらって、楽しかつ
たな。」「おじいちゃんは昔のことを、よく知っているのだな。」「近くでゆ
っくり、はっきり話すと、よく伝わるのだな。」などと気付いた。

②社会性を育む活動

【食育 全体計画に基づく食育指導】

当校では、食に関する指導の全体計画に基づき、『食の喜び』に気づき、感謝して食生活を営む子を6年間かけて体系的に育てることを目標とし、以下の観点において目標を立てて、全学年において食育指導を進めた。

『食の喜び』の観点	各観点で目指す子ども像
食べ物への感謝	食生活が、多くの人々の努力や動植物の命、自然に支えられていることに気づき、感謝の気持ちをもって食べる子
心身の健康	栄養バランスのとれた規則正しい食事が、心身の成長と健康のために重要であることに気づき、よりよい食生活を送る子
生活の潤い	食べ物に興味関心をもったり、味わって食べたり、食文化に触れたりすることが、心を豊かにし、生活に潤いを与えることに気づき、大切にする子
社会性の獲得	食事のマナーや食事の準備・片付けの協力、和やかな会食が、相手を思いやる楽しい食事に繋がることに気づき、食事を通して豊かな人間関係を築く子

2月に全学年1学級抽出で食生活アンケートを実施したところ、全体計画作成前(H27)と比較し、全ての目標の観点において改善が見られた。特に、「社会性の獲得」の中の食事のマナーについては、96%の児童が、意識して食べることができるようになった(全体計画作成前は79%)。給食中の児童の様子や、返却された食器等の状態を観察していても、食事のマナーについては大きく改善していると感じている。

③環境に対する意識を高める活動

【環境委員会活動】

環境委員会では、環境をよくするために自分たちに何ができるのかを話し合い、計画をして活動を進めた。構内のあまり清掃が行き届いていないところをきれいにしたり、清掃時間のごみ回収を行ったりした。また、自分たちにできそうな取り組みを考え、ペットボトルキャップと書き損じはがきの回収を企画、実行した。子どもたちからは、「自分たちの呼びかけで、これだけ集めることができ、環境のためによいことができうれしい。」「これからも、自分の周りや地球の環境のことを考えて過ごしていきたい」などという感想が聞かれた。



〔①：高齢者を招いた活動（研究発表会）〕〔②：食育指導の例（はしの使い方）〕

(2) 活動の詳細

①活動内容

ア. 活動分野

1. 環境 9. 健康・福祉 10. 食育

イ. 活動を通して育みたい資質や能力

4. コミュニケーションを行う力 5. 他者と協力する態度
6. つながりを尊重する態度 7. 進んで参加する態度

ウ. 活動時間

1. 教科の時間 2. 総合的な学習の時間 3. 特別活動等

エ. 使用した教材

②ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導方法を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。

- ・「ユネスコスクールとしての活動」として位置付けていない。ただし、当校がユネスコスクールであると自覚して、教科指導や教科外指導を行っている。
- ・当校（各教科）が目指す児童像に迫るため、数年スパンの研究実践の中で、指導方法の工夫改善に取り組んでいる。

③学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組をおこなっているか。

- ・これまで、研究校として研究実践に取り組む中で、組織や体制を整えてきており、それが校務分掌上に反映させているため、教科指導や教科外指導を学校全体で組織的かつ継続的に取り組むことができている。

④ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。

- ・学校運営の自己評価（教員評価）を年度末に実施
- ・児童、保護者アンケートを実施
- ・上記の内容を踏まえて、次年度への方向性を検討
- ・以上の内容を学校評議員の方々へお伝えして、助言をいただく
- ・成果：各教科で育成を目指す資質や能力が身に付いてきている
一律の答えのない問いに対して解決していこうとする態度がみについてきている
- ・課題：幼小中一貫教育の中で、目指す子ども像に迫るために連携して育成すること

⑤ESDの推進拠点として活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。

- ・各教科の指導方法の工夫を、毎年開催する研究発表協議会において成果を発表するとともに提案し、参会者の方からの意見を得ることで、更なる改善を目指すことができる。

⑥学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成（地域コミュニティ、

大学、ESD 活動支援センター、ESD コンソーシアムとの連携など)

- ・大学の共同研究者との連携
- ・各地区発表会への参加、意見交換

⑦国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成

- ・特になし

⑧ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）

- ・特筆すべきものはない。ただし、附属学校としての使命を全うする中で、ユネスコスクールの活動も効果をあげている。

(3) 平成 30 年度の活動計画

- ・研究のあり方を見直す一年としたい。

今後の研究テーマや取組の具体など、一年かけてじっくりと構想していく年としたい。